

# 平城京右京 8条1坊10坪 発掘調査概報



1990.12

大和郡山市教育委員会

『平城京8条1坊10坪発掘調査概報』正誤表

		誤	正
P. 9	L. 3	笠部最大径13.2mm	笠部最大径23.2mm
P. 10	L. 7	同じく4は	同じく41は
P. 10	L. 8	4は、	42は、



発掘調査は、真夏のうだるような暑さのなかで行われた。したたり落ちる汗を手でぬぐいながら、奈良時代の井戸が少しづつその姿をあらわしてゆく。続々と出土する土器や、瓦。木製の独楽。それらはまるで昨日埋められたかのような姿で発見される。発掘者の手に、思わず熱がこもる。その時、彼の目に「奇妙な果実」が映った。1200年の時を越え、金色に輝く「果実」。日本最古の“分銅”発見の瞬間である。

## 例　　言

1. 本書は、大和郡山市九条町108—1、109において実施した平城京関連発掘調査の概報である。

2. 調査は、㈱パラティーナによるマンション建設を契機とし、同社の委託により実施した。調査期間は平成2年6月13日～同8月8日、調査面積は約300m<sup>2</sup>である。

3. 調査は、以下の組織によって実施した。

(事務一般)

大和郡山市教育委員会社会教育課（課長　矢田正二）

(現地調査)

技師：山川均、濱口芳郎（大和郡山市教育委員会）

補助員：下大迫幹洋（奈良大学）、武田浩子（佐保女学院O.B.）

作業員：岸田勝信、堀川正治、米田利男、杉山典三、谷瀬喜一、尾崎明、大橋一夫、

今西卯ノ松、嘉幡嘉弘、喜多みえ子

4. 本概報は、下記の分担により作成した。

(製図、トレース) 山川、濱口、下大迫、武田、荒木浩司（奈良大学）、本村充保（同）

(執筆) 山川（I、II-1、III）、濱口（II-2）

(編集) 山川

5. 本概報作成にあたり、下記の方々より貴重な御教示を賜った。記して感謝の意をあらわします。

(順不同、敬称略)

杉山洋、巽淳一郎、玉田芳英（奈良国立文化財研究所）

篠原俊次（日本計量史学会会員）

宮本佐知子（大阪市文化財協会）

芝田和也（松原市教育委員会）

大鎌淳正（大和郡山市文化財審議委員）

石野博信（奈良県立橿原考古学研究所）

中井　公（奈良市教育委員会）

西山要一（奈良大学）

6. 表紙等のイラストは竹内直子（京都女子大学）による。

## 本文目次

I 調査の契機および経過.....	1
II 調査の概要	
1. 遺構.....	2
2. 遺物.....	6
III まとめ.....	12

## 図表目次

図1 調査地および周辺の遺存地割 (S: 1/10,000) .....	1
図2 平城京城坊復元図および今回の調査位置.....	2
図3 調査区地区割図 (S: 1/200) .....	3
図4 基本層序 (S: 1/20) .....	4
図5 SE-01平面図および断面図 (S: 1/40) .....	5
図6 SE-01出土遺物実測図1 (S: 1/3) .....	7
図7 包含層出土遺物実測図 (S1/3) .....	8
図8 SE-01出土遺物実測図2 (S: 1/2) .....	9
図9 出土遺物実測図及拓影 (金属器、錢貨他 S: 1/1) .....	11
表1 分銅成分分析表.....	10
表2 鉱金具成分分析表.....	10

## 図版目次

図版1	1. SE-01 井戸枠断面 断ち割り状況 (東より) 2. 同上 井戸枠最下部縦板組状況 (西より)
図版2	1. SE-01 調査風景 2. 遺跡写真撮影風景
図版3	SE-01 井戸枠内出土遺物 (土器、瓦)
図版4	SE-01 井戸枠外出土遺物 (土器)
図版5	包含層出土遺物 (土器、瓦) (金属器その他)
図版6	出土遺物 (金属器その他)

## I 調査の契機および経過

今回の調査は、民間のマンション建設に伴う事前調査として実施した。平成元年11月6日、対象地に地下遺構有無確認のための試掘調査を実施し、その結果、良好な包含層の存在を確認したので、マンションの建物部分について、本調査を実施することにしたものである。

ところで、この「良好な包含層」とは図4の直層のことである。この層は、秋篠川の氾濫によって形成された層だが、この層の存在は、その下位に奈良時代の遺構が存在しているという保証みたいなもの、との認識が、少なくとも我々の間にはあった。ところが今回の調査によって、その「保証」はすこぶるあやしいものになってきた。これは、後に詳述する。

ともあれ、本調査は夏の盛り、異常気象の酷暑のなか、汗と涙のうちに終了した。その概要を以下に記す。



図1 調査地および周辺の遺存地割 (S : 1 / 10,000)  
(『大和國条里復元図』より)

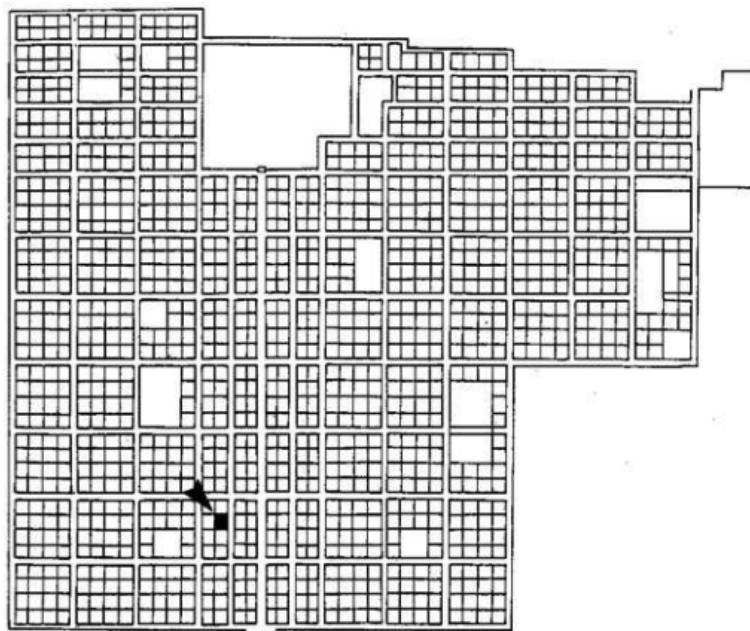


図2 平城京条坊復元図および今回の調査位置

## II 調査の概要

### 1. 遺構

#### ①調査方法（基本層序）

本来ならば、ここでは調査方法→基本層序と、報告してゆくべきであろうが、今回は事情によつてひとまとめに報告する。それは、後に述べるように、今回の調査方法は、主として層序によって決定されたものであるからだ。

ところで、平城京の南辺あたりはその背、瓦の材料にうつつけの粘土が採れることで有名であつた（らしい）。そこで、本来ならば平城京の遺構がある層が、この粘土採掘、つまり土取りによつて著しい破壊をうけていることが、これまでの調査においてはしばしば見られた。しかしながら、この土取りは、中世～近世初頭において盛んであり、それ以後はあまり見られない。さて、ここで、図4を参照してほしい。この図中、重層とした灰色砂層は、秋篠川の氾濫によって形成されたとさ

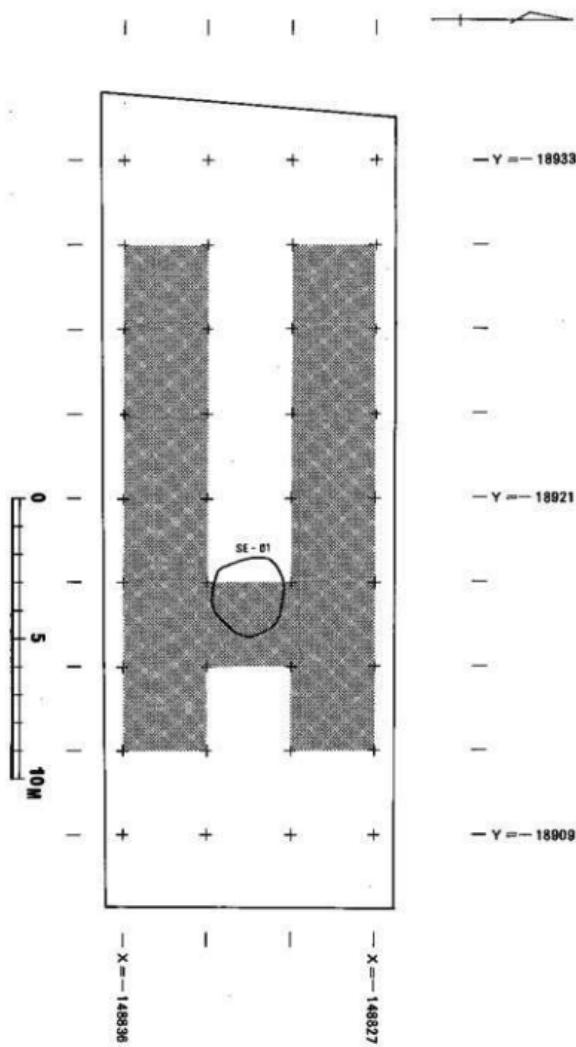


図3 調査区 地図剖面 (S : 1/200)



図4 基本層序 (S: 1/20)

れる層で、この氾濫性堆積土は、このあたり一帯に広く認められるものである。そして、この層の形成時期は、14世紀前後、といわれていた。つまり、土取りに先行する時期の層、というわけである。つまり、この層の存在は、より下位の層が土取りによって荒らされていない、という安全バイのようなものであったのである。

しかし、土取りは、行われていた。重機によって、Ⅲ層を除去した我々の目前に、信じ難い光景が、現われたのである。一面、土取りによる擾亂土（図4のIV層）。そこには、あるはずの平城京の遺構は、ぜんぜんなかった。ここに我々は「常識」の脆さ、頗りなさを垣間見たのであった。

しかしながら、遺構にだつていろいろある。たとえば、この「土取り穴」だって遺構だし、この穴の下には、井戸など、深めの遺構はまだ残っている可能性は充分にある。気をとり直した我々は、平城京調査時の地区割によって設定された3m方眼を一単位とし、グリッド方式によって擾乱層下の遺構探索、および同層中の遺物採取を主眼とした調査を実施したのである。図3中、トーンを付した部位が、グリッドによる調査を実施した部分である。結果、井戸がひとつ、検出された。いかに土取りがはげしくとも、井戸のように深い遺構は残っているのだ。そして井戸内よりは後章で紹介するような素晴らしい遺物が多数、出土したのであった。「発掘調査は、ねばりが勝負だ。」我々が、学生時代、師や先輩からたびたび言われたこの言葉、まさに箴言である。

## ②SE-01

ここでは、こうした艱難辛苦の末、ようやく見つけた奈良時代の井戸について、その概要を報告する。井戸は、掘り方の直径東西約3m、南北約2.4mを測る。井戸枠は井桁組の上から一段目で、一辺約1mである。その枠は、上から4段目までを長さ約110cm、幅約26cmの横板組み、最後の5段目のみを縦板組みとしている。これは、湧水を効率良く井戸内に導くための工夫であろう。井戸枠自体の高さは約2mある。また、井戸の掘り方は検出面より約4mもあった。おまけに湧水がきわめて激しかったため、井戸の断ち割りは重機によって周囲をばさりと削って実施した。そのため、いいわけがましいが、あまり良好な断面図は作成し得なかったのである。

なお、井戸枠上端（2m程）は抜き取られていた。この抜き取りは中世以後、すなわち、土取り

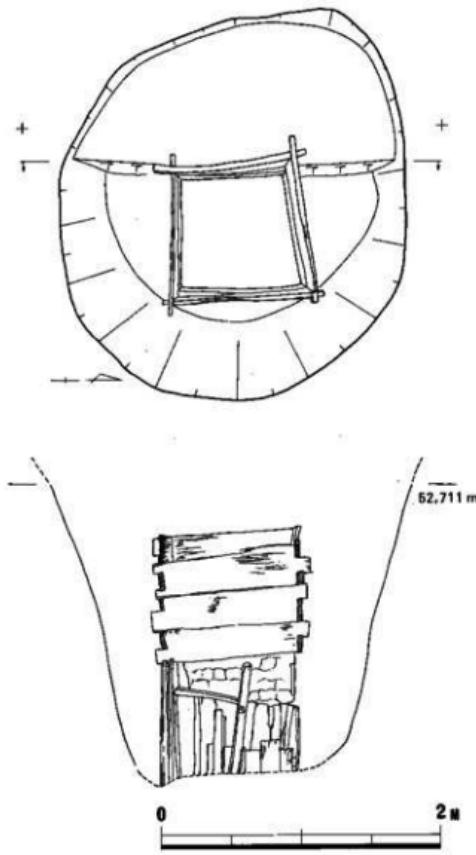


図5 SE-01平面図および断面図 (S : 1/40)

て貴重である。

また、枠内よりは、土器、錢貨（神功開寶、万年通寶）などが出土した。これらはいずれも井戸埋没時（8世紀第4四半期）の資料と思われる。

以上の出土遺物より、このSE-01は掘削後、比較的短期間のうちに廃棄されたもののように見受けられる。

時に行われたものようだ。それは、抜き取り穴中に含まれた中世土器（瓦器等）により知られる。

井戸枠に用いられていた材は、上段4段、すなわち横板組の部分に関してはヒノキの柾目を用いており、それをホゾ組み、5段目の縦板に関しては、スギの柾目を用いて、これを杭によって支える構造をとっている。いずれの材も、建築部材からの転用と思われる。特に横板組の材に関しては、手斧の痕跡が実にみごとに遺存していた（これらの材に関しては、今回詳しく述べることができなかったが、いずれもP・E・G処理によって保存されている。いずれ復元し、展示の予定）。

出土遺物については、抜き取り穴、掘り方、枠内の3種を、さらに分層してとり上げた。このうち、抜き取り穴に関してはほとんど遺物は出土しなかった。次に、掘り方内からは、多くの土器のほか、錢貨（和同開珎）、分銅、刀子、鉄斧等が出土した。掘り方内出土ということより、これらはいずれも井戸掘削時の資料と考えられる（8世紀第3四半期）。なかでも分銅は、日本最古、かつ最小（後述）の資料とし

## 2. 遺物

遺物は包含層からもかなり多数出土しているが、現在まだ整理作業が進行中であるため、ここではSE-01出土遺物を主に、一部整理の終了しているものについて報告する。なお包含層中の遺物はその九割以上が奈良時代のものであり、少量の中世土器がそれに伴う。また金属工房に関係する遺物として坩堝などが出土している。

### 土器

SE-01井戸枠内出土（図6-1～7 図版3-1～7） 須恵器では杯B蓋（1・2）、杯A（3）、壺L（7）、壺M（4）、土師器では杯B（6）、碗A（5）が出土している。

1・2はともに外面ほぼ全面をヘラ削りする。3の底部には判読できないが墨書が見られる。4は井戸最下層より錢貨（図4-39～45）とともに出土しており、SE-01廃絶時期を示す資料である。肩部に自然輪が見られる。7は底部未調整で粘土縫痕を残す。5はC<sub>3</sub>手法で調整され、内面は口縁部から底部まで同時にヨコナデされている。6はC<sub>1</sub>手法で調整されているが、ミガキは粗い。内面は螺旋・斜放射暗文を施す。

SE-01井戸枠外出土（図6-10～17 図版4-10～17） 須恵器杯B（11・13・14）、皿C（12）、壺A蓋（10）、土師器杯A（16）、皿A（15）、皿B（17）が出土している。13・14には墨書が認められ、前者は「合」、後者は「\*」と読み取れる。10のつまみ頂部はうずたかくもりあがり宝珠形をよく残しており、口縁端部は、内外面間に段を生じている。16は口縁部B形態で螺旋・斜放射暗文をもつ。15も口縁部B形態でC<sub>3</sub>手法、暗文は施されない。17もまた口縁部B形態でC<sub>3</sub>手法、内面に螺旋・斜放射暗文がみられる。底部は丸底となり高台は形骸化している。

包含層出土（図7-18～27 図版5-18～27） 須恵器では杯A（22・23）、杯B（20・21）、杯B蓋（18・19）、皿A（24）、土師器は皿A（25）、皿C（27）、壺A（26）がある。18・19はともに口縁部B形態であるが、19の口縁部はやや屈曲する。22は底部にわずかなケズリを施すのみである。25・27はa<sub>0</sub>手法で調整される。このほかに綠釉陶器片が2点（図版6-46・47）出土している。

瓦（図6-8・9 図版3-8・9 図7-28～31 図版5-28～31） 調査地全域から多数出土しているが、軒平瓦SE-01井戸枠内より1点、包含層より4点出土している。文様はすべて平城宮式6691Aであるが、瓦芯の劣化に差異がみられ8・28・30が最もしっかりしており、統いてやや劣化したものが31、最も劣化した時期のものが29である。焼成は8・31が最もよく須恵質を呈しており、28・29・30がやや軟質で白色を呈する。9は丸瓦であるが、先端面に「王」の刻印がある。

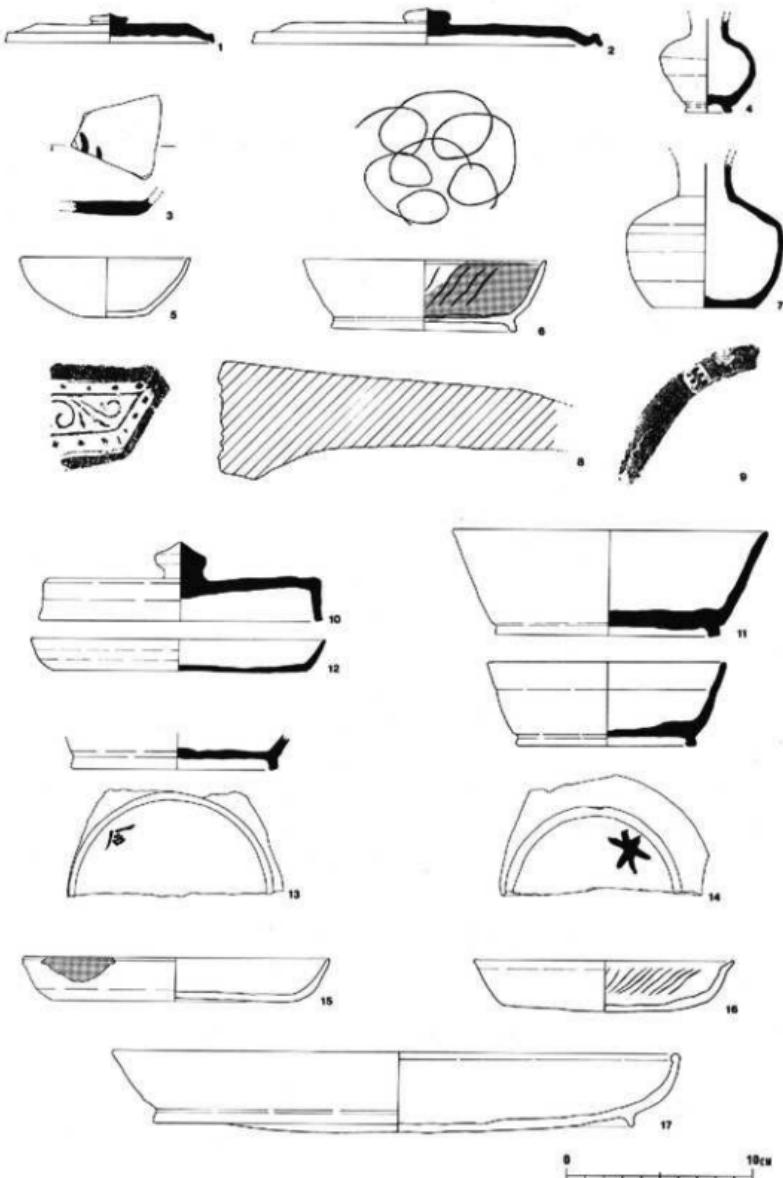


図6 SE-01出土遺物1実測図 (1~9枠内、10~17枠外 S: 1/3)

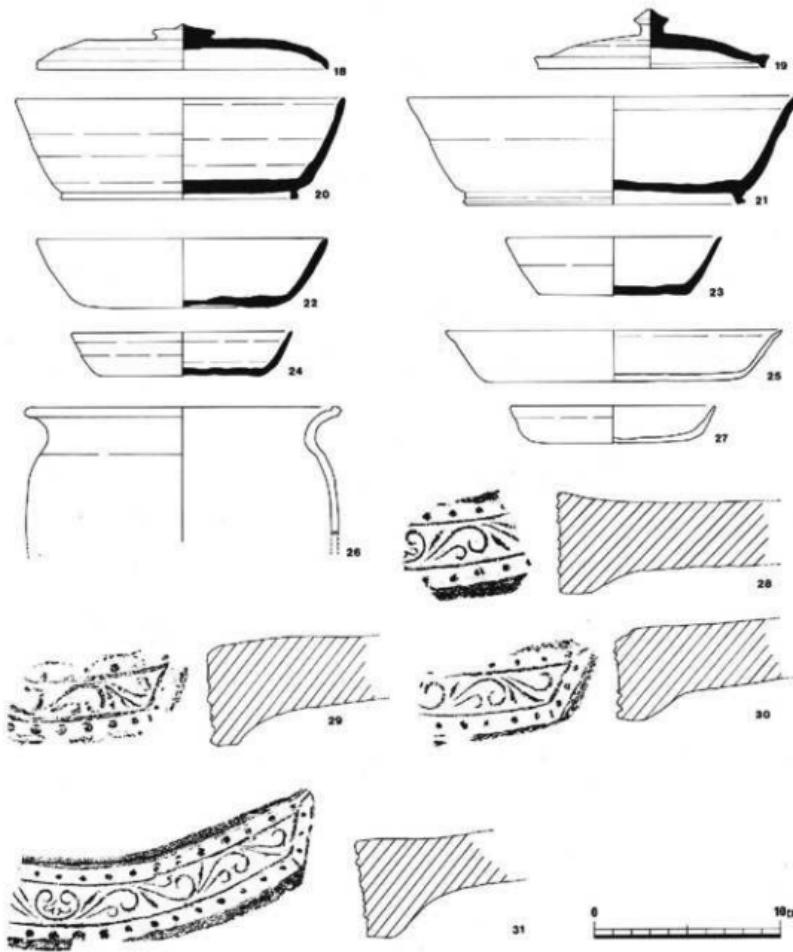


图7 包含层出土遗物实测图 (S: 1 / 3)

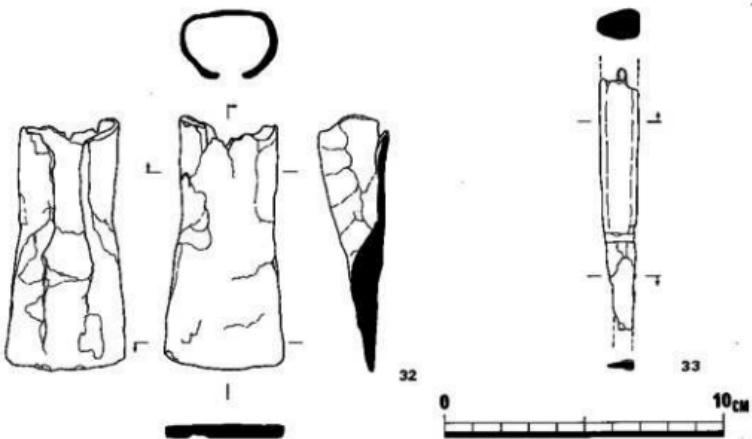


図8 SE-01出土遺物 2実測図 (S: 1/2)

金属器 (図8-32・33 図版6-32・33 図9-34・36 図版6-34・36) 32は、鍛造鉄斧である。出土時には木質（柄部）も遺存していた（現在処理中）。あるいは、井戸枠整形に使用した手斧かもしれない。全長9.0cm、幅4.3cm、厚さは刀部9mm、袋部2mmを測る。33は刀子である。木質の柄部が折損しているものの、遺存している。（木質は未鑑定）刀部と柄部の境に銅製の飾巻がみられる。全長9.2cm、幅は刀部1.1cm、柄部1.4cm、厚さは刀部において1.8cm（鋸を含まず）を測る。

34は、鍾で井戸枠外より出土した。鋳造のちさらに笠部鋸を削っている。重量は40.0404gで隋の度量衡、一両=41.89gに近似した数値を示す。<sup>①)</sup> 笠部鋸の削られていることに加え、鋸にもえぐり込みがあり、これらは重量合わせのためのものと見られる。このことから分銅として使用されたものと推定される。なお笠部端に傷があることから、重量に狂いが生じ、廃棄されたとも推定される。高さ26.0mm（鋸7.1mm・笠部14.3mm・突出部4.6mm）笠部最大径13.2mm、鋸の幅7.1mm、厚さ2.1mm、孔径3.9mmである。成分分析は別表1のとおりである。これまでに確認されている古代にさかのぼる金属製鍾の出土例は、平城京左京九条一坊二坪のものほか、滋賀県桜内遺跡出土例、<sup>②)</sup> 大阪府河合遺跡出土例、島根県出雲国府跡出土例、福岡県多々良込田遺跡出土例などがある。<sup>③)</sup>

36は飾金具である。中心やや上寄りに方形の留孔を有する（3×4mm）。全体の意匠はバルメットが施されており細部を毛彫りによって仕上げる、精巧なものであるが一部に削り残しも見うけられる。形状より考えて、小刀の柄頭、あるいは仏具等の飾金具としての用途をもつものと考えられる。全長40.2mm、幅11.1mmを測る。なお成分分析については別表2の通り。

**銭貨** (図9-37~45 図版6-37~45) SE-01より出土した銭貨としては、枠外より出土したもの2例(37・38)、枠内より出土したもの7例(39~45)がある。前者は井戸の掘削時期、後者はその廃絶時期をほぼ示していると思われる。37・38は和同開珎の同范資料である。3は字体の一部が欠損するなど、保存状態は悪い。あるいは熱による変形の可能性もある。直径は、37が25.0mm、38が24.3mmをそれぞれ測る。

39~41・45は、神功開宝(初鋲 765年)である。39は、功の字が功(他のものは刃)である点に特色がある。径は25.4mm。40・41は同范の資料。40の直径25.1mm、同じく4は24.8mmをそれぞれ測る。4は、字体および直径が他のものに比してひとまわり大きい(径26.2mm)。ちなみにこれは古泉界では「大字大様」と称している。

42~44は、萬年通宝(初鋲 760年)である。42は、年の点の部分が短く、古泉界では珍重される資料である。43・44は同范と思われる資料である。このうち後者は、38の和同開珎のごとく、熱による変形を受けている。直径は42が26.3mm、43が25.8mm、44が26.4mmである。

なお、銭貨についての京内における同范関係等は未調査である。

**木製品** (図4-35 図版6-35) 35は、木製の独楽である。材質は軟らかい広葉樹材(心持材)を使用している(材質は未鑑定)。上端に直径16mmの円孔を穿つ。芯の部分には鉄を用いている。その形状は平城京内に通有に認められるもので、いわゆる「朝鮮ゴマ(叩きゴマ)」に類するものである。高さは3.4cm、上端部直径2.3cmを測る。

**その他の遺物** 水晶が1点(図版6-48)包含層中より出土している。形状で六角柱状を呈するが、いずれも自然面である。付近より36の飾金具も出土していることから、装飾品の材料として持ち込まれたものと思われる。

組成成分	錫の上からの分析	錫を除去しての分析
Cu・錫	78.08	66.70
As・砒素	8.14	15.27
Mo・モリブデン	—	4.16
Ag・銀	—	5.18
Si・ケイ素	4.97	4.18
Al・アルミニウム	3.85	3.18
S・硫黄	1.93	—
Cl・塩素	1.57	—
K・カリウム	0.74	0.19
Fe・鉄	0.71	0.54
Ca・カルシウム	—	0.61
計	100.00	100.00

別表1 分析成分分析表(重量濃度%)<sup>(6)(7)</sup>

組成成分	錫の上からの分析	錫を除去しての分析
Cu・錫	50.54	99.30
Au・金	30.84	—
Fe・鉄	4.31	0.28
Mo・モリブデン	3.59	—
Al・アルミニウム	3.35	0.42
O・酸素	5.88	—
Ag・銀	0.66	—
Si・ケイ素	0.87	—
計	100.00	100.00

別表2 飾金具(重量濃度%)<sup>(6)</sup>

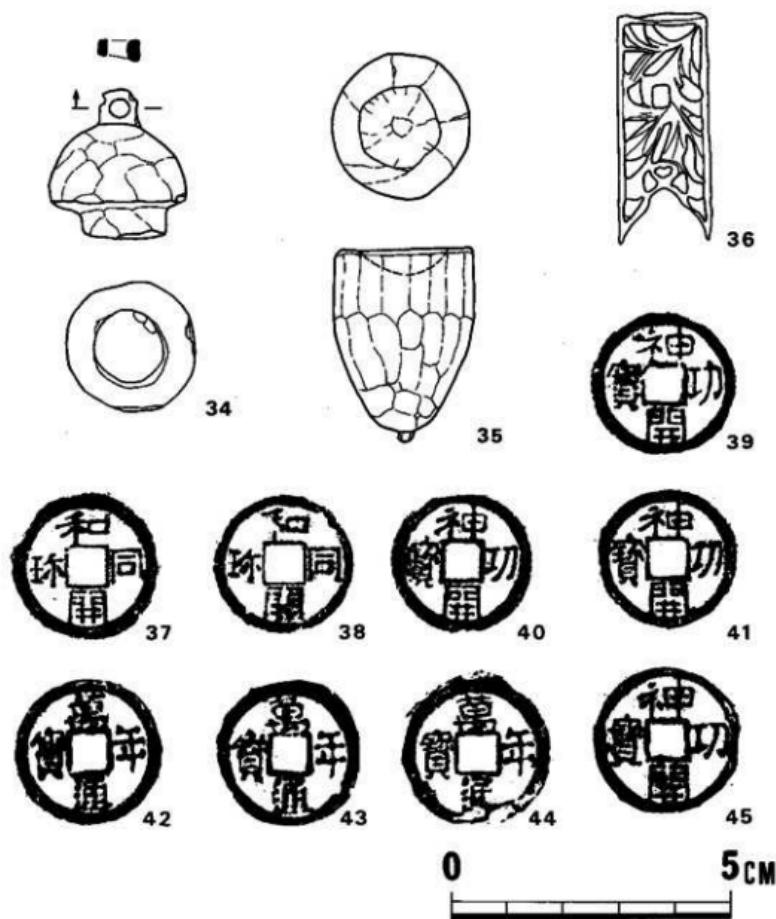


图9 出土遗物实测图及拓影（金属器、钱货他 S: 1/1）

### III まとめ

Ⅰ章、およびⅡ章でも触れたが、今回の調査は、重機による表土除去直後に、遺構面が土取りによって擾乱されているという決定的な事実があった。本来ならば、ここで調査は断念するところである。しかしながら、ここで根気強く、擾乱層を少しづつ除去していったことにより、結果としてSE-01の検出、さらにその内より分銅などの一級資料を発見することができた。また、その擾乱層中自体からも飾金具や水晶原石等の資料が出土した。これらの資料は、いずれも奈良時代、該地周辺が京内においてどういう役割を果たしたかを考えるうえで、きわめて重要な資料と思われるが、そうした問題やさらには出土した資料自体に関する考究は今後において発掘を担当した我々の責務であろうし、それは後に発行する本報告書中で行うつもりである。

なお、今回の概報作成においては実に多くの方々のおせわになりましたが、なかでも奈良市教育委員会の中井公氏には、分銅に関し多方面にわたって御教示いただきました。厚く御礼申し上げます。また、今夏の異常とも思える暑さのなか、最後まで発掘調査を支えてくれた作業員の皆さん、概報作成で深夜まで頑張ってくれた補助員諸君にも、心より感謝いたします。どうもありがとうございます。

#### <註>

- ①『中国度量衡史』
- ②中井公「平城京左京九条一坊二・七坪境小路の調査 第167次」「奈良市埋蔵文化財概要報告書」奈良市教育委員会 1989年
- ③滋賀県埋蔵文化財センター「埋もれた文化財の話」3 1982年  
谷口義介「滋賀県桜内遺跡出土の金属継」「熊本短期大学論集」第37巻第2号 1986年
- ④松原市教育委員会「河合遺跡発掘調査概要」 1989年
- ⑤福岡市教育委員会「多々良込田遺跡Ⅲ」 1985年
- ⑥分析は西山要一氏（奈良大学）に委嘱した。データーは下記の通り。
  - ・分析日時 1990. 8. 10
  - ・分析方法 X線マイクロアナライザー (HOROBA EMAX-2770)
  - ・分析者 村瀬龍（畠場製作所分析センター）
- ⑦分析結果より、地金は銅・砒素・銀・モリブデンの合金からなることがわかる。砒素は銅銅の際、湯（溶銅）の流れをよくするために使われることが多く、銅製品にしばしば含まれるが、本資料は相当多量に含まれる。他の分析データーとの比較が必要である。

図 版





1 井戸枠断面断ち割り状況（東より）



2 同上 井戸枠最下部継板組状況（西より）



1 S E-01 調査風景



2 造跡撮影風景



1



2



4



7



6



5



8



9

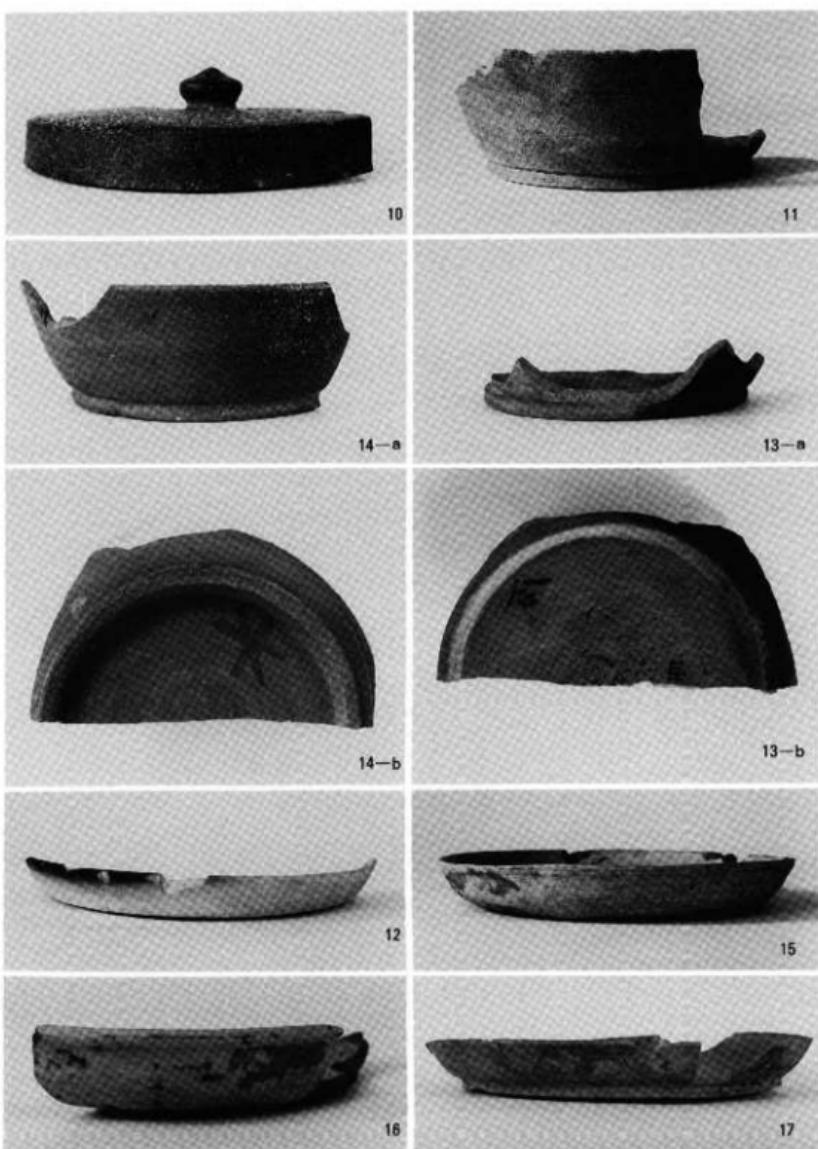


3

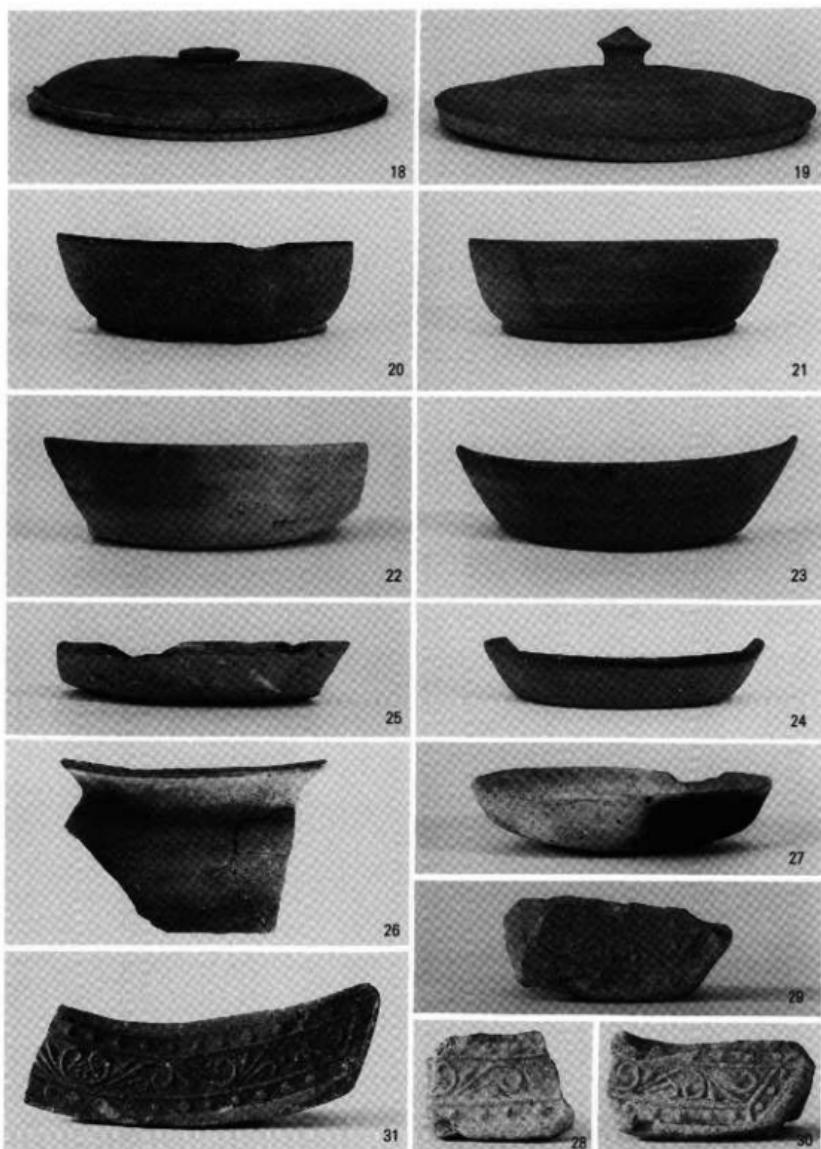


9部分

SE-01 井戸枠内出土遺物(土器・瓦)



SE-01 井戸枠外出土遺物（土器）



包含層出土遺物(土器・瓦)



34



36



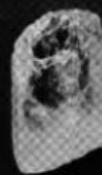
35



37



38



39



41



43



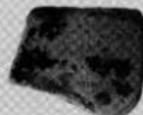
42



45



40



46



47



32-a



32-b



33

大和郡山市文化財調査概要19

平城京右京8条1坊10坪発掘調査概報

---

平成2年12月26日 発行

編集 発行 大和郡市教育委員会  
大和郡山市北郡山町248-4

印刷 明新印刷株式会社  
奈良市橋本町36

---

